

□海外文献紹介□

大腸における神経・内分泌系の癌

Neuroendocrine cancers of the colon and rectum: *Saclarides TJ, Szeluga D, Staren ED, et al* (Dis Colon Rectum 37: 635-642, 1994)

著者らは結腸および直腸における神経・内分泌系の癌の頻度を調べ、組織の相違により予後に差があるかどうか検討した。

1980年から1990年までの10年間に大腸癌の切除術を受けた988症例中、神経・内分泌系の癌(NE癌)は、39例(3.9%)で、平均年齢は65.5歳(28~89歳)、男性が25例、女性が14例であった。部位別には、右側結腸が19例、左側結腸が11例、直腸が9例であった。Dukes分類

では、Dukes A が1例(3%)、Dukes B が7例(18%)、Dukes C が16例(41%)、Dukes D が15例(38%)であった。モノクロナル抗体を用いた免疫組織化学染色で検討した結果、NEパターンは、NE純粋型が11例、NE優位型が17例、外分泌混合型が7例であった。細胞型では、小細胞癌が15例、中分化型が15例、高分化型が5例であった。最もよく染色されるマーカーは、ニューロン特異的エノラーゼが25例、セロトニンが25例、VIPが23例であった。腫瘍の大部分は、カルチノイドであり、免疫組織化学染色後では神経・内分泌系癌と診断された。

予後でみてみると、6か月生存率

は58%、3年生存率は15%、5年生存率は6%であった。生存期間では、Dukes分類で比較すると、Dukes Bが平均24か月、Dukes Cが11か月、Dukes Dが4か月であった。NEパターンでは、NE純粋型が平均7か月、NE優位型が5か月、外分泌混合型が22か月であった。細胞型では、小細胞癌が平均5か月、中分化型が11か月、高分化型が22か月であった。

以上の結果から、大腸癌の中で占める神経・内分泌系の癌は3.9%であり、NE純粋型とNE優位型および小細胞癌は予後が悪かった。

(愛知県がんセンター消化器内科

小野 博美 抄)